資料館だより

港区立 港郷土資料館

第 62 号
2008.9.30

特別展予告

港区文化財保護条例施行 30 周年記念特別展

悠久の旅人Ⅲ　過去から、そして未来へ

港区指定文化財 30 年の軌跡

港区指定文化財第1号　明治学院記念館

港区文化財保護条例は、今年施行30周年を迎えました。昭和54年に明治学院記念館ほか４件の文化財が港区指定文化財に指定されて以来、今年までに113件が港区の宝として指定されています。この中には瑞聖寺大雄宝殿のようにその後重要文化財に指定されたことによって、区指定が解除されたものもあり、現在では106件が港区指定文化財となっています。当館では10年ごとにその間に指定された文化財の紹介を行なう特別展「悠久の旅人」を開催してきましたが、21世紀を迎え、最初の区切りの年となる施行30周年の本年は、これまでの30年間に指定された文化財をできる限り多く展示し、港区指定文化財の歴史を振り返ります。

展示は会期を２期に分け、前期には新橋・虎ノ門・芝公園・芝・三田地区の文化財を、後期には高輪・白金・赤坂・青山・麻布地区の文化財を展示します。展示替のため当館が休館となる前期と後期の間の１週間には、協賛事業として芝公園にある妙定院において、同寺所蔵の港区指定文化財の特別公開を行ないます。

絵画や歴史資料を中心に、当館と妙定院をあわせ50件120点の指定文化財が展示され、建造物や史跡などは写真パネルを用いて、106件の指定文化財の全てを紹介する予定です。また、港区指定文化財の全てを掲載する資料集も刊行します。港区指定文化財30年の軌跡をご覧ください。

特集・天璋院がいた時代と港区

時代の変革期の考古学

－郷土資料館講座とその講義ノートから－

髙山　優
（学芸員）

徳川将軍家13代将軍家定夫人天璋院、通称篤姫は、天保７年（1836）薩摩藩島津家今和泉領主島津忠剛の子として生まれました。篤姫はその後、島津本家斉彬の子として育てられ、安政３年（1856）には近衛忠熙の養女となり、この年の12月、将軍家定の正室として輿入れを果たします。篤姫は、安政５年の家定逝去に伴い落飾し、天璋院の号を得た後も、幕政を支え続けます。とりわけ明治維新期には、静寛院宮・輪王寺宮公現法親王（北白川宮能久親王）とともに徳川家救済に尽力し、その後は徳川宗家を継いだ亀之助（徳川家達）の養育に専念、明治16年（1883）48歳で波乱の生涯に幕を閉じます。

天璋院がこの世に在った1830年代から1880年代は、時代が大きく動いた半世紀に当たります。港郷土資料館では、この時代の変革期に焦点を当てた講座「天璋院がいた時代――時代の変革期と港区――」を、５月16日から６月13日まで、５回に分けて行ないました。

講座の様子

講座では、主として文献史学の研究成果から、幕末の港区の様子、女性史から見た天璋院や当時の幕府と朝廷との関係を学びました。また、大河ドラマ「篤姫」の制作スタッフから、どのような視点でドラマ制作に取り組んできたかについて知る機会を設けました。さらに、近世・近代の移り変わりを考古学の世界から垣間見ることを試みました。

ところで、主に先史時代あるいは若干の文字資料が残されている時代の研究分野として出発した考古学は、時代とともに守備範囲を広げ、近年では近世はもとより、近代も調査・研究の対象として取り込みつつあります。その代表的な調査例が港区東新橋にある新橋停車場跡の考古学的調査です。

新橋停車場は、江戸時代の大名屋敷跡に整備されたわが国最初の鉄道駅です。調査では、プラットホーム、駅舎跡や転車台など、近代の鉄道駅に関連する様々な遺構・遺物が発見されました。こうした新橋停車場跡の調査成果は、近代考古学の進展に大きな役割を果たすとともに、近世から近代にかけて顕著な変化を見せた土地の歴史を探る上で、考古学的手法がかなり有効であることを示しました。また、麻布賢宗寺脇に造営された鍋島家墓所の改葬に伴う調査から、明治維新後の20年間に新たな葬制墓制が確立したことを知ることができます。

わが国の近世の終焉と、近代という新たな時代の幕開け、そして成立は、まさに天璋院が生きた50年ほどの出来事でした。この間の歴史を物的証拠をもってどう描くか、これからの考古学の大きな課題の一つです。

特集・天璋院がいた時代と港区

薩摩藩の江戸屋敷について

吉崎　雅規
（元文化財保護調査員）

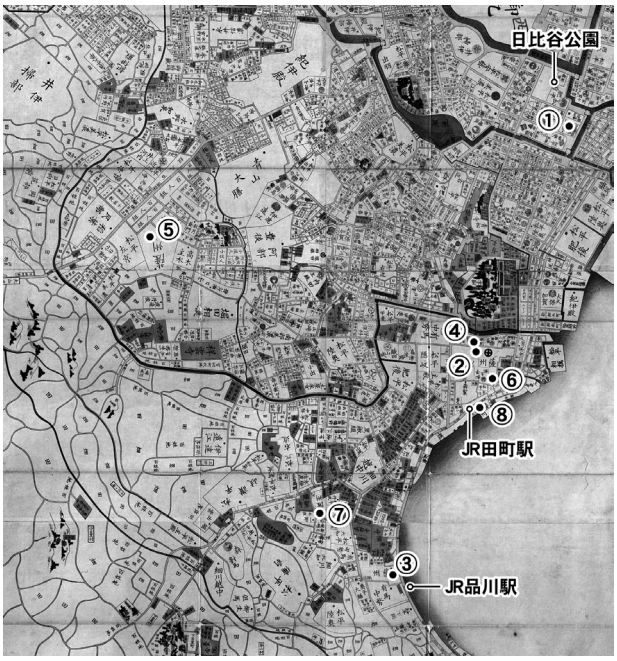
高視聴率が続くＮＨＫ大河ドラマ「篤姫」。主人公・篤姫は嘉永６年（1853）10月に鹿児島から江戸の薩摩藩芝屋敷に到着します。安政２年（1855）10月の安政大地震で同屋敷が被害を受けたため、篤姫は渋谷の下屋敷に引越し、翌３年11月に将軍家定との婚儀のため江戸城に移りました。

篤姫が最初に住んだ薩摩藩の芝屋敷は日本電気株式会社（NEC）本社がある港区芝２～５丁目付近にありました。２万5000坪を越える広大な敷地に藩主の御殿、奥方の住居、江戸詰め家臣の長屋のほか庭園もつくられており、薩摩藩の江戸屋敷の中心的存在だったのです（なお上屋敷は桜田にありましたが、藩主は芝屋敷に居住しました。このような屋敷を「居屋敷」と称しています）。

次に篤姫が移り住んだ渋谷の下屋敷は渋谷区東にあったのですが、敷地の一部が港区南青山にかかっています（『復元江戸情報地図』による）。江戸城に入る前の篤姫は港区とそのすぐ付近に住んでいたのです。

薩摩藩の主要な江戸屋敷は下図の９ヶ所でした。そのうち６ヶ所が港区内にあったのですが、桜田上屋敷も港区境から数百メートルの場所（帝国ホテル付近）にあり、渋谷屋敷も一部が港区にかかっていたことを考えると、ほとんどの薩摩藩江戸屋敷は港区とその付近に集中していたことがわかります。高輪に隣接する品川宿の遊客は、半分が増上寺の坊主、３割が薩摩藩士と言われており、港区とその周辺地域において薩摩藩の屋敷と藩士たちは大きな存在感を持っていたのです。

○幕末薩摩藩の主要江戸屋敷



屋敷種別	所在地	獲得年	地図	坪数
上屋敷	幸橋御門内（桜田）	慶長15（1610）	①	6858坪
中屋敷（居屋敷）	**芝新馬場（芝）**	慶長12（1607）～13	②	２万1785坪余（他に借地3400坪）
下屋敷	下高輪（高輪）	寛文９（1669）	③	１万4605坪余
下屋敷	芝新堀端	安永2（1773）	④	2909坪余
下屋敷	**中渋谷（渋谷）**	嘉永5（1852）	⑤	１万3923坪
抱屋敷	芝下町	？	⑥	1071坪
抱屋敷	下高輪村（白金）	文政4（1821）	⑦	4601坪
抱屋敷	大井村	？	—	１万8468坪
町並屋敷	芝四丁目同田町壱丁目同所裏町（田町）	寛文年間（1661-73）以降	⑧	6033坪余

*表は安政３年現在。『諸向地面取調書』第１冊より作成。獲得年は『東京市史稿』市街篇、第49巻。絵図は『分間江戸大絵図』（慶応元年（1865）、本館蔵）

コーナー展

東京タワーと昭和のくらし

川上　悠介
（文化財保護調査員）

昭和33年（1958）12月にオープンした東京タワーは、今年で50年の節目を迎えます。東京タワーは、パリのエッフェル塔を越す世界で最も高い電波塔として国内外から注目を浴び、時代の象徴的な建造物となりました。また、テレビやラジオの電波が発信される公共アンテナとしての役割を担うとともに、設置された展望台には各地から人々が訪れ、東京の観光名所にもなっていきます。

テレビ放送が始まったばかりの昭和30年代初めには、各放送局が自分たちの放送を発信するために各局で電波塔を建てていました。しかし、それぞれが塔を建てていては効率的ではないことや、電波塔の乱立による混信が問題となり、電波塔を一本化する構想が立ち上がります。この構想は、東京タワーの運営会社となる日本電波塔株式会社の社長、前田久吉らによって進められました。

タワーの建設候補地には、現在東京タワーが建つ芝公園のほかに、上野公園も挙げられていました。およそ4000tの重さの鉄骨を支えるためには、砂礫（されき）層と呼ばれる硬い地盤まで杭を打たなくてはなりません。砂礫層は芝公園で地表から約20m、上野公園では約30m下に位置しています。この砂礫層までの距離が浅く、工事が容易であることから芝公園が敷地として選ばれました。その揺ぎ無い地盤に建つ東京タワーは自立鉄塔に限っていえば、現在でも世界一の高さを誇っています。

この東京タワーが建設された昭和30年代は、身近な生活道具が電気によって革新的な進歩を遂げ、人々の生活に大きな変化をもたらした時代でもありました。昭和30年代初頭は電化元年と言われるように、多くの家電製品が一般家庭に広まりはじめています。中でも白黒テレビ・電気洗濯機・電気冷蔵庫は「三種の神器」と呼ばれ、人々の憧れの製品でした。開業当初の東京タワーのパンフレットにも、新型テレビの広告が数多く載せられています。

テレビと言えば、昭和39年（1964）の東京オリンピックがカラーテレビの普及に大きな影響を与えたことは有名な話ですが、東京タワー建設と同じ年に発表された、当時の皇太子明仁親王と美智子様のご成婚も人々がテレビを購入するきっかけとなったようです。翌34年４月10日にはお二人の結婚パレードが行われ、その模様が各テレビ局で一日中放送されました。今回展示したテレビの一つは、そのパレードを見るために購入したものだそうです。このテレビは、先に紹介した東京タワーのパンフレットに広告が掲載されており、当時の最新モデルであったこともわかりました。また、昭和34年の東京タワーのチケットは、真紅の背景に金の鳳凰があしらわれたデザインに変更されています。日本中が明仁親王と美智子様のご成婚を喜び、お祝いムードに包まれていたことが窺（うかが）える資料です。

このように、テレビ一つ、チケット一つをとっても、この時代の暮らしの様子や世相を知ることができます。今回の展示にあたり、港区内外の方々から、東京タワー関連資料や昭和30～40年代に製造された多種多様な家電製品をご提供いただきました。本展では東京タワーの建設経緯や建設当時の周辺景観を紹介するとともに、皆さまからご提供いただいた資料を通して、戦後復興を成し遂げ高度経済成長期を迎えた人々の暮らしの様子を垣間見ることができたと思います。

最後になりましたが、本展開催にあたりご協力いただきました方々に心より御礼申し上げます。

《夏休み体験ミュージアム》

今年で３回目となる夏休み体験ミュージアムは「チャレンジ！古代のアクセサリーを作ろう」と題し、勾玉（まがたま）の制作体験を行いました。

勾玉は動物の牙に穴を開けたペンダントが元祖と言われており、縄文時代には滑石（かっせき）や蛇紋岩などの石で作られるようになります。

人物埴輪の首周りに勾玉が表現されていることから、首飾りとして使われていたと考えられ、弥生時代、古墳時代には硬玉やガラスで作られるようになります。港区では丸山古墳群から勾玉が３点見つかっています。

この勾玉についての興味を深めてもらおうと、７月 31 日、昨年に引き続き東京都埋蔵文化財センターから講師をお招きし、滑石を素材とした勾玉作りを行いました。やすりやサンドペーパーを使い、四角い滑石を勾玉の形に削っていきます。子供たちはひたすら石を削り、それぞれの勾玉を作り上げました。

なお、定員をはるかに超える応募があったことから、多くの方に参加していただけるよう２回に分けて実施し、保護者を含めた 60 名が参加しました。

勾玉作りの様子

（文化財保護調査員　杉本　絵美）

見て・さわって・学ぼう！
夏休み事業報告

《夏休み学習会》

東京海洋大学附属水産資料館との連携事業として実施している夏休み学習会も４回目を迎えました。今年は「東京湾の海の植物・干潟の生物」をテーマに、小学校４年生から中学校１年生までの児童・生徒とその保護者を対象として開催しました。

初日の８月 19 日は東京海洋大学附属水産資料館で、海の植物＝海草や藻類について学習しました。海藻と海草の違いや、動き回る藻類を顕微鏡で観察したり、毎年恒例となっている海藻のしおり作りに真剣に取り組んでいました。

翌日はお台場の干潟にすむ生き物を実際に探してみました。砂浜にある小さな穴はカニの巣穴であること、波打ち際では小粒ながらアサリやシオフキなどの貝がたくさんすんでいることがわかりました。また、やや濁って見えるお台場の海水を入れた水槽に貝を入れておくと、やがて澄んだ水になることを実験で確認して、こうした貝類が東京湾の水の浄化にとても役に立っていることなどを学びました。

自然界の不思議や環境保護の大切さをあらためて知ることができた二日間でした。

お台場の干潟の生き物探し

（学芸員　松本　健）

資料紹介

芝神明町の大型犬

山根　洋子
（文化財保護調査員）

芝神明町(現：港区浜松町一丁目辺り)は江戸時代初頭から町人の居住地として利用された場所で、この地域の一角に当たる芝神明町町屋跡遺跡では、人々の生活を物語る建物の跡や様々な道具類と共に複数のイヌの骨が検出されました。

３号犬(註)は横たえられた状態で出土しており、埋葬犬と考えられます。骨の遺存状態が悪いため、詳細な観察・計測はできませんでしたが、頭蓋骨の最大長は200㎜前後と大きく、左大腿骨全長は167.0㎜、左脛骨全長は162.6㎜であることがわかりました。生前のイヌの体高（肩までの高さ）を各骨の大きさから計算すると、頭蓋骨からは52㎝弱、四肢骨からは46.4㎝と推定されます。比較的大きなイヌですが、頭蓋骨からの推定体高と四肢骨からの推定体高に５㎝以上もの開きがあることが気になります。実は、３号犬は頭部・頸部が他の部位と少し離れた位置で検出されているので、頭部・頸部とそれ以外の骨が別の個体である可能性もないとは言えません。しかし、残存している骨の部位が重複していないことなどから、すべての骨を同一の個体として問題はないと考えています。３号犬のように、頭蓋骨と四肢骨から推定される体高に開きがある例は、品川区仙台坂遺跡や港区汐留遺跡でも見られます。これらのイヌについては、その大きさや形態から洋犬との見方が示されており、部位による推定体高の違いは、頭の大きさと足の長さのバランスが、日本犬とは異なることをあらわしていると言えます。３号犬に見られる頭蓋骨からの推定体高と、四肢骨からの推定体高の開きも、洋犬の可能性を示唆するものと考えてよいでしょう。

本遺跡で出土したもう１つの個体（１号犬）は、出土状況が明らかではありませんが、頭蓋骨や四肢骨等が比較的揃っていることから、３号犬と同様に元々は埋葬されていたものと思われます。１号犬の頭蓋骨最大長は203.0㎜、左大腿骨全長は184.0㎜でした。推定体高は50㎝程度となり、他の江戸遺跡から出土しているイヌと比較してもかなり大きなサイズです。江戸時代のイヌは50㎝を超えると大型と言え、洋犬の可能性も高くなってきます。１号犬も骨が全体に大きいことや、頭蓋骨や四肢骨が頑丈で逞しい形態をしていることなどから洋犬と考えられます。また、１号犬の頭蓋骨には怪我もしくは病気の治癒痕が観察されるほか、下顎骨には歯槽膿漏の痕跡も認められました。自力で餌を見つけなければならない野良犬は、怪我をしたり病気になると生存が困難になるので、これらの治癒痕は飼育の証拠となります。さらに、歯槽膿漏はやわらかい餌を豊富に与えられていたために起こる歯周症と言えますので、これも大切に飼われていた証でしょう。

3号犬出土状況
（左下に見える骨が頭骨と頸骨）

従来、大型犬は武家屋敷跡から出土することが多く、大名など有力武士が権力の象徴として飼育したと考えられていました。江戸庶民の生活跡である芝神明町町屋跡遺跡から出土したイヌは、埋葬するほど大事にされた大型の洋犬が、武家地だけではなく町人地でも飼育されていた可能性を示す興味深い事例です。

（註）：調査・整理段階で便宜上付けた番号。

参考文献：山根洋子「芝神明町町屋跡遺跡出土のイヌ」『研究紀要』8 港区教育委員会 2005

遺跡さんぽ

亀塚の謎（後編）

杉本　絵美
（文化財保護調査員）

江戸時代、亀にまつわる伝説の地であった亀塚ですが、近代に入ると古墳説が登場します。

明治35年（1902）に亀塚を調査した坪井正五郎氏は、『続江戸砂子（ぞくえどすなご）』に記された「亀」は土器の「瓶（かめ）」であり塚から出てきたのは亀ではなく土器である、と考えました。そして亀山碑の酒壺の言い伝えは、暴風雨によって塚上の土器が動かされ塚の中の石室の一部が現れたものであろう、と考えたのです。こうして古墳として知られるようになった亀塚は、その名から帆立貝式古墳あるいは前方後円墳ではないかと考えられるようになりました。

本格的な調査は、慶應義塾大学考古学研究室によって行われました。昭和45年（1970）に測量調査、46年（1971）に発掘調査が行われ、指揮を執った清水潤三教授（当時）は頂部から裾部にかけて溝状に掘り、なるべく塚を壊さないように調査を行いました。調査の結果、人工的に土が積み上げられており、また塚の直下から弥生土器の破片が出土したことから、弥生時代以降に造られた塚であることがわかったのです。しかし、埋葬施設や墳丘周辺をめぐる溝（周溝）が発見されなかった為、古墳であると断定することはできませんでした。

その後、近世の塚の可能性も浮上したことから、亀塚の性格を明らかにするため平成15年から18年にかけて港区教育委員会が亀塚公園内において亀塚本体及びその周辺の発掘調査を断続的に行いました。亀塚本体の調査は昭和46年調査地点の再調査に加え、塚の数箇所を新たに掘って行われました。

その結果、亀塚が古墳である決定的な証拠となる埋葬施設を発見することはできませんでしたが、亀塚の周辺には弥生時代の集落跡が広がり亀塚はその集落の上に作られていることがわかりました。また、塚を築造する為に積み上げられた土の中から近世以降の遺物が全く見つからなかったことから、亀塚は弥生時代以降、中世以前に作られたと考えてよいと思われます。周溝が見つかれば古墳である可能性がさらに高まるのですが、塚の西側から古墳の周溝の可能性がある溝の一部が見つかったものの近世以降の土地利用によって大きく壊されていた為、明確な周溝を確認することができませんでした。

亀塚は一体いつ、何の為に造られたものなのでしょうか。江戸時代から人々の興味を引き付けてきた亀塚ですが、その正体は今も謎に包まれたままです。

亀塚直下から出土した弥生土器（昭和 46 年調査）

現在の亀塚（平成 20 年）

※12/13 から 4/15 まで、常設展で亀塚関連資料を紹介します。

事業予定（平成20年10月～）

港区文化財保護条例施行30周年記念特別展

悠久の旅人Ⅲ　過去から、そして未来へ

港区指定文化財30年の軌跡

第1会場：港区立港郷土資料館

第Ⅰ期　10月13日（月・祝）～11月3日（月・祝）
第Ⅱ期　11月11日（火）～30日（日）
9:00～17:00（会期中の毎週金曜日は19:45まで）
休館日　祝日を除く月曜日、10月16日（木）、11月4日（火）～10日（月）、11月20日（木）

第2会場：妙定院（芝公園4-9-8）

11月3日（月・祝）～9日（日）10:00～16:00

資料館講座

「甦る日本の美　-文化財修復の現場から-」
11月14日・21日・28日（金）18:00～19:30

・親子学習会「港区たてものウォッチング」
　11月15日（土）、22日（土）
・コーナー展「発掘速報展-西国大名の江戸屋敷-（仮）」
　12月13日（土）～平成21年4月15日（水）
・常　設　展「これが見どころ　見せどころ」
　12月13日（土）～

・各事業の詳細は、『広報みなと』または郷土資料館ホームページをご覧になるか、当館までお問い合わせください（連絡先は本頁右下に記してあります）。
・当館の刊行物は、ホームページに一覧を記載し、展示室横の事務室で販売をしています。

事業報告（平成20年３月～平成20年９月）

① 特別展「東京ミッドタウン前史　赤坂檜町の三万年　旧石器～長州藩下屋敷～歩兵第一連隊」　3月11日～4月13日
② コーナー展「新収蔵資料展－平成19年度受け入れ資料－」　4月26日～6月14日
③ コーナー展「館蔵資料展　江戸往還図絵巻（複製）」　7月1日～7月16日
④ コーナー展「東京タワーと昭和のくらし」　7月18日～9月27日
⑤ 常設展「これが見どころ　見せどころ」　4月26日～9月27日
⑥ 資料館講座（前期）「天璋院がいた時代－時代の変革期と港区－」　全5回（5月～6月）
⑦ 古文書教室　全5回（7月～8月）
⑧ 夏休み体験ミュージアム「チャレンジ！古代のアクセサリーを作ろう」　7月31日
⑨ 夏休み学習会「東京湾の海の植物・干潟の生物～お台場の干潟にすむ生き物を探してみよう！～」　8月19日、20日

さわれる展示室より

昨年度から夏休み中は郷土資料館を日曜・祝日も開館し、さわれる展示室の利用時間を延長しました。宿題を抱えたグループや畳の上でくつろぐ家族連れなどで、展示室はいつもより賑やかな雰囲気でした。可愛い「豆博士」の登場に、学芸スタッフが舌を巻くことも…！
9月からのさわれる展示室は、平常どおり火・水・金・土曜日の12:30～16:30　開いています。
今後もぜひご利用ください。

港区立港郷土資料館の利用案内

交通　ＪＲ田町駅より徒歩５分　都営地下鉄三田線・浅草線三田駅より徒歩２分
都営バス「田町駅前」停留所下車徒歩１分　港区コミュニティバス(ちぃばす)「田町駅前」停留所下車徒歩１分「田町駅西口」停留所下車徒歩３分

開館時間　９：00～17：00

休館日　日曜日・祝日・第３木曜日
年末年始・特別整理期間

※特別展前後特別休館※
9月29日(月)～10月12日(日)
12月1日(月)～12日(金)

入場料　無料

『資料館だより』62号
平成20年（2008）9月30日発行
編集・発行　港区立港郷土資料館

〒108-0014　東京都港区芝5-28-4
Tel.03(3452)4966　Fax.03(5476)6369

http://www.lib.city.minato.tokyo.jp/muse/

港区は、環境に関する国際規格ISO14001の認証を取得しました。
港区は、みどりの保全とごみの減量に努めています。
この印刷物は、古紙を利用した再生紙を使用しています。

刊行物
発行番号
20062-7541